

検討会の論点と 前回の委員意見について

平成30年1月19日
国土交通省国土政策局

【論点1】 経済・産業構造や、人々の暮らし、価値観等が今後大きく変わっていく中で、リニアやその他の高速交通ネットワーク(新幹線、高速道路、航空等)等の整備によって、交流・対流に要する時間の劇的な短縮が、ビジネススタイルやライフスタイルにどのような影響を及ぼす可能性があるのか。

- ①経済・産業や、人々の暮らしのスタイルや、価値観は、リニアの整備が進む中長期間に、どう変化
する可能性があるのか。その変化において、人の移動に要する時間が短縮することの意味は何か。
- ②リニアの開業及びその他の高速交通ネットワークの整備によって、例えば、次の点にどのような
可能性があるのか。
 - ・新たな価値創造、研究開発、生産方法、働き方、取引関係の拡大、人材の獲得や育成方法など
にどのような変化を生じさせる可能性があるのか。
 - ・大都市部の高齢者の生きがいや、若者・中高年齢者の自己実現や観光・娯楽・癒しなどに対する
ニーズの増大等、暮らしの質の充実や、そのための新たなビジネスなどに、どのような可能性があ
るのか。
 - ・海外から人や投資を引きつける国際的な魅力の向上について、どのような可能性があるのか。
- ③新たな交通サービスや交通基盤、都市環境などにどのようなことが望まれるか。

※上記について、ゲストスピーカーの意見を伺う。

※尚、リニア開業の見通しは、東京-名古屋間が、2027年頃、東京-大阪間の開業が、2045年頃から
最大8年間前倒しと想定されている。

上記に加えて、

リニアによって生じる時空間的な人口の増大や、産業の集積、知の対流の活発化等による経済効果
について、可能な限り定量的な分析を行う。

検討会の論点

【論点2】 論点1において明らかにされるリニア等の整備効果を「引き出す」ために、各地で共通して取り組むべきことは何か。

- ①企業、大学や研究機関等の交流・対流を促進し、イノベーションの創出につなげるためには、何が必要で、何に取り組むべきか。
- ②大都市部の高齢者の生きがいづくりなど、暮らしの質の向上に対するニーズに対応し、これを新たな価値創造やビジネスの拡大につなげるためには、何が必要で、何に取り組むべきか。（セカンドライフにおける新しい幸福を創出するにはどのようにすべきか。）
- ③地域の文化・伝統を引き出し、新たな価値創造につなげるためには、何が必要で、何に取り組むべきか。
- ④海外の人と投資を引き付ける魅力ある地域づくりにつなげるためには、何が必要で、何に取り組むべきか。また、海外への情報発信、ニーズの把握はどうするべきか。

【論点3】 論点2を踏まえ、論点1において明らかにされる効果を「引き出す」ための国土デザイン、地域デザインの基本的方向をどう設定すべきか。

- ①三大都市圏の地域づくりで目指すべき基本的な方向はどう設定すべきか。
- ②中間駅を中心とする地域の地域づくりで目指すべき基本的な方向はどう設定すべきか。特に、プロモーションや地域ブランディングなどを進めていくためには、どのような要素に着目すべきか。
- ③リニアの効果を全国に拡大するための方策は何か。特に、インフラの質の向上、進化の基本的方向はどうあるべきか。

【奈良県 荒井 正吾 知事 発表

「スーパー・メガリージョンとリニア中央新幹線が国土形成に与える影響を 地方の視点で考える」についての意見交換】

- (1) 各地域の発展の核となる大都市圏がその能力を発揮するためには、都市住民がリフレッシュできる場所として、森林、農村と補完的、融和的に関係を結ぶことが重要。それによってビジネススタイルやライフスタイルも大きく変化していくが、ハード整備による交通の結節性の確保に加え、住民サービス等ソフト施策についても検討し、変化に対応していく必要がある。
- (2) 同じ場所で同質なもの同士が肩を寄せ合うのではなく、交流があることで異質なものが入って新しい価値が生まれる。そのためには、単に交通ネットワークを高度化するだけではなく、各地域における独自性を維持していく必要があるが、ある地域では異質であるが、他の地域では合うというように異質なものを温存する場所の存在を認める懐の深い社会が必要であり、異質なものを受け入れる気持ちがないと交流の意味が生まれない。
- (3) 東海道新幹線の開業をきっかけに経済開発が進んだ地域に比べて、交通が不便だった奈良には、結果として奈良本来の良さが今でも温存されており、これは紀伊半島全体に共通している。
- (4) 奈良とリニアが結節することに関して、歴史的に見れば、仏教や漢字、律令制度など、古来、奈良は、海外から多くのものを受け入れてきたが、すべてを受け入れたのではなく生活規範など残すべきものは残してきた。国際社会に向かう際の日本の知恵として、温存すべき価値が何か自覚しないといけない。

【株式会社電通 電通若者研究部 奈木 れい 研究員 発表

「10～20代の若者の価値観の実態」についての意見交換】

- (1) 若者の地元志向の背景には、家族や友人との協調を重視する価値観との関係が間違いなくあるが、シェアハウスなど家族の定義が、必ずしも血縁関係のある地元に残らない緩やかさをもっていることも注目される。
- (2) リニアを若者へアピールするために重要なことは、リニアが何のために使えるのかを共有すること。例えば好きな人たちと住みながら都市でも仕事ができる、さらに地元でも仕事ができるような自己実現ができる地域を目指し、インフラや環境を自治体等地域が取り組んで実現していくことが必要。
- (3) 外国人留学生は、発言、興味の持ち方、前向きな姿勢など日本人学生とはパフォーマンスが全く違う。留学する日本人も減少しており、リニアが開業する10～20年先を見据えれば、世界との関係性が弱まることでは、その揺り戻しが懸念される。
- (4) 世界の若者のトレンドとして、ミレニアルズという世代があり、家族のまとまりがあり、生き方のゆるやかさが特徴的である。「高級ブランドが欲しい」とか「定職に就いて安定的な収入があればいい」といった価値観だけでなく、別の選択肢を見出す緩やかさがあり、ある種の価値観の転換が起こっているのは確かである。